

38. モモ新品種「もちづき」の生育特性と加工適性

福島県果樹試験場 栽培部 平成8年～10年度試験研究成績書

1 部門名 果樹－モモ

04－02－27000000

2 担当者 高野靖洋・志村浩雄・瀧田誠一郎

3 要 旨

モモ新品種「もちづき」は収穫期に達しても着色しない特性を持ち、無袋栽培が可能な加工用品種である。その生育特性について検討するとともに、食味アンケート調査を通じて「もちづき」の缶詰製品に対する消費者の嗜好性を調査した。

(1)「もちづき」の発芽期、開花期及び収穫期は「大久保」とほぼ同時期であった。果実の大きさは200g程度で、「大久保」より小さかった。平成11年(樹齢7年生、結実4年目)の収量は1樹当たり77.7kg、10a当たりの換算収量は2873kgだった。樹冠の拡大により、将来的な10a当たりの収量は3500～4000kgと見込まれるが、「大久保」に比べると少ないと考えられた。また、「もちづき」は一般品種に比べて樹勢が非常に強く、細く長い新梢が多く発生し、枝が下垂しやすいので、せん定は長果枝を切り戻すとともに側枝や骨格枝の形成時にも切り戻しを加えて受光体勢の良い樹形づくりに努める必要がある。

(2)アンケートの対象者は福島県果樹試験場参観デーの来場者から無作為に抽出し、2日間で約300名に対して行った。年代別構成は、60代が最も多く、次いで30代、40代、50代の順であり、男性約40%、女性約60%の割合であった。アンケートの結果、「もちづき」の缶詰品質は、外観、肉質、評価(食味)とも優れていた。また、品種名を知らせず「もちづき」と「大久保」の比較を行った結果、「もちづき」の方が優るとの回答が全体の58%であり、「大久保」の約2倍であった。

(3)以上のことから、「もちづき」の収量性は「大久保」より劣るが、缶詰品質が優れ「大久保」に比べて消費者の嗜好性が高い品種であると判断された。